

## 編集後記

昭和三四年一二月に当「早稲田大学図書館紀要」が創刊されてから、今回で四〇号を迎えることになった。創刊号から三〇号までは年一回の刊行だったが、三一号からは年二回の刊行となり、創刊から三五年で四〇号に達したわけである。

数字に意味があるわけではないが、一つのくぎりであることは確かなので、小特集というほどでもないが記念のコナーをつくろうと考え、歴代の館長・副館長に何かお書き下さいませんか、とお願いしてみた。すると、ほとんど直ちに、大野實雄先生から原稿が届いた。大野先生といえば当紀要の生みの親であり、今日の早稲田大学図書館近代化の礎を築かれた館長である。編集委員一同感激したが、ひらいてみて驚いた。そこにはわずかに四行ほどの警句のようなものが書かれてあるのみだったからである。

大野先生の図書館へのお気持が、行間から伝わってくる思いがしたが、さてこれをどのように掲載したものか、編集子は思い悩んだ。そこで、大野先生のお弟子で前館長でもある奥島孝康先生に相談することにした。奥島先生は次期総長に選出されたばかりで、ご多忙をきわめておられたが、快く引受けて下さり、ご自身の原稿の冒頭に大野先生の言葉を掲げる形でまとめて下さった。たいへん有難いことであった。大野先生にも、これでお許しいただけると思っている。また、ご丁寧な原稿をお寄せ下さった平田富太郎先生、加藤諄先生にも御礼を申し上げたい。四〇号を機に、ますますの充実発展を期したいと思う。

ここまで書き、本号を責了としようと思っていた矢先、十一月二十六日に、大野實雄先生が逝去されたという悲報が届いた。編集子としては、何ともいいようのない気持である。ただ、四〇号をお手もとに届けて、ぜひご覧いただきたかった。奥島先生も書いておられるが、紀要のこと、そして図書館のことを、あれほど思ってくださった先生はいなかったと思う。紀要は四〇号にして生みの親を失い、独り立ちしなければならなくなった。大野先生のご冥福を、編集委員一同、また図書館職員一同、謹んでお祈りする。

来年は、大槻玄沢の家塾「芝蘭堂」で太陽暦による新年がはじめて祝われた寛政六年閏一月、いわゆる「おらんだ正月」からちょうど二〇〇年にあたる。折しも館蔵の大槻玄沢関係資料が一括して新しく重要文化財の指定を受けたこともあり、本誌では次号を「洋学特集」とする予定である。

前号に掲載した、田口親「おっぺヶ節について」に關して、作詞家で歌謡史研究家の西沢爽氏が「ご丁寧なお便りを下さり、二箇所、誤植をご指摘いただいた。以下に掲載し、感謝とお詫びを申し上げます。」

一二五頁 上段 九行

(誤) 大郎坊小國 (正) 太郎坊小國政

同頁 上段 一〇行

(誤) 変体仮名か (正) 変体仮名

(記・松下)

### 早稲田大学図書館紀要 第40号

一九九四年十一月三十日 発行

編集 早稲田大学図書館紀要

編集委員会

発行人 安 江 國 浩

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所 早稲田大学図書館

東京都新宿区西早稲田一ノ六ノ一

03(3110)1141-1